

教員を目指す学生の SCS 交流会

教育学部附属教育実践総合センター長 羽 賀 敏 雄

haga@cc.hirosaki-u.ac.jp

平成 13 年度に 3 回にわたり、SCS 学生交流会が開かれた。弘前大学、上越教育大学、信州大学、鳴門教育大学、広島大学、宮崎大学など 10 大学が参加した。教育学部は、体験活動を通じて子どもと触れ合う機会を 2 年次学生に提供しており（フレンドシップ事業）、その経験を、居ながらしてリアルタイムで共有しようとする試みであった。教育職員免許法が改正になり、体験活動が教員養成課程にどのような意味をもつかについて研究するプロジェクトに科研費がついた関係もあり実現した。

フレンドシップ事業は国立教員養成大学・学部の全てが実施しており、実に様々な取り組みが行われている。ふれあうことで子ども理解を図ること、事業における教育委員会の役割がどうあるべきか検討すること、地域・家庭の教育力にふれることなど様々な目的を持っている。交流会では各大学での取り組みの紹介があり、残った時間でトピックを絞って議論を深める流れで進んだ。ねらいが多様なだけ、議論がかみ合わないところもあったが、遠方にある大学の学生と感覚に訴えながら交流できることで新鮮な感じがした。

その経験を生かし、秋田大学と平成 14 年 12 月 19 日に SCS を使った最初の北東北学生交流会を開いた。11 月の国立教育実践研究関連センター協議会の場で岩手大学と秋田大学に交流をもちかけたところ、両大学とも乗り気で、日程の都合でとりあえず弘前・秋田の 2 大学で実施することになったのである。「私は青森県出身です。画面に映っている C さんは私の友達です」「のぞみに乗ったよ」。秋田側からとび出したこれらの発言で、隣接する地域にある大学との交流だという実感がわき、交流会場の緊張が一遍にほじけた瞬間だった。

フレンドシップ事業では、活動を学生が創意工夫することも大きなねらいの一つである。SCS 交流会を学生自身が組み立てるように指導した。2 大学の学生リーダーが情報を交換し合って、どのような段取りで交流をすすめるか決めた。弘前大学の学生が司会をすることになり、交流会の 2 時間のほぼすべてを学生が運営した。

フレンドシップ事業は、体験活動中の安全性については十分配慮しているが、それ以外は学生に特別な情報を与えていない。公立学校と連携した活動では生活科の授業や総合的な学習の時間を使うことが多いが、これらの教科の性格について学生に特別に情報を与えることはしていない。人とのふれあいを主目的にし、ふれあいを若者らしい豊かな感性で感じてもらえばよいのである。このことも、今回の SCS 交流会を、学生主体で運営させる発想の一つだった。

フレンドシップ事業では、体験活動の後、振り返りのためのシンポジウムを 11 月上旬に公開で実施している。3 年次半ばに履修する教育実習までの間、ふれあいの感動を如何に持続させるかも支援者である教官に課されたテーマである。北東北の 3 大学の SCS 学生交流会をシンポジウム後に実施することは、上の課題への取り組みとして多様な人とのふれあいの場を広域で提供することであり、学生にとっても極めて意味があると考えている。